

脳科学の第一人者と言え、川島隆太先生である。東北大学教授であることは認識していたが、現在は、東北大学加齢医学研究所所長である。その川島先生が、脳科学、認知科学、そして心理学の研究成果から子どもたちの教育における問題について話している内容を入手した。特に、スマートフォン等のICTの活用に関して、脳科学の見地から大いに警鐘を鳴らしている。

「大脳」は大きく「前頭葉」「頭頂葉」「側頭葉」「後頭葉」の4つの場所に分かれ、子どもたちの教育のカギとなる場所は、「前頭葉」の運動の場所の前側に広がる「前頭前野」と呼んでいるところ。この「前頭前野」の働きから、心の脳と思考の脳の2つについて説明します。

運動と五感の脳は、概ね5歳ぐらいで大人のほぼ9割以上まで成長が進み、その後はあまり大きく成長しません。だから幼児期、保育期における様々な活動がとても重要で、その頃にいかに多彩な運動や経験をし、感覚を使ったかで、子どもたちの運動と五感の脳という器が決まってしまう。

一方、思考の脳である「前頭前野」は、0歳から5歳まで急激に発達し、その後思春期の入り口まではゆるやかに発達し、思春期に入った途端、また爆発的に発達が続いて30歳ぐらいまでゆっくりと発達が続きます。「前頭前野」に関して言うと、思春期以降自分の力で自分の脳を成長させるチャンスがあるということです。

5歳までが、一つのポイントであることがわかる。このことが世の中に、どのくらい広まっているだろうか。以前から思っていたことだが、小学校に入るまでの教育に、もう少しスポットライトが当たってもいいように思う。

運動と五感の脳は、概ね5歳ぐらいで大人のほぼ9割以上まで成長が進み、その後はあまり大きく成長しないのである。そうであるならば、考えるべきである。だが、現実には、多くの家庭、特に保護者に時間的な余裕がなく、そうしたくてもできない状況があるように思う。

このことに関しては、小学校に入ってからでは、すでに手遅れの感がある。しかし、思考の脳は違う。思春期に入った途端、爆発的に発達が続くのである。5歳までとは違って、思春期以降は、自分の力で自分の脳を成長させるチャンスがあるのである。

こんな大切なことを、どのぐらいの中学生や高校生が理解しているだろうか。先生方は、どうであろうか。川島先生が、爆発的にとおっしゃるのである。中学校は、こんなチャンスを逃してはいけない。